

簡牘研究の新たな地平を切り拓く

森 和

オーレル・スタインによる敦煌漢簡の発見やフォルケ・ペリイマンによる旧居延漢簡の発見によって幕を開けた中国出土簡牘研究はすでに一世紀近くわたる歴史がある。その間、一九七〇年代以降に顕著になる墓葬出土簡牘や二十一世紀初めに発見された里耶秦簡に代表される古井出土簡牘、さらには盗掘されて流出したものを博物館や大学の研究機関などが購入収蔵した購蔵簡牘など、資料の種類と数量も著しい速度で増え続けており、西北辺境の軍事防衛施設跡から出土した簡牘においても肩水金閼漢簡が最近公刊されたばかりである。現在、このような簡牘資料は歴史分野に止まらず、古代中国に関する研究全般にわたって必要不可欠なものとして認知されているが、その土台となる従来の簡牘研究には二つ

の欠陥、すなわち簡牘の形態に対する検討の不足と簡牘の動きに対する認識の欠落があったという。本書はこれに対して木簡が考古遺物であることを研究の初期段階から明確に意識していた日本の木簡学に倣い、簡牘に対する「物に即した精密な考察」を進め、簡牘史料固有のライフサイクル（製作・使用・移動・保管・再利用・廃棄、形態）を明らかにしようという論文集である。その構成は以下の通り。

前言

第一部 調査篇

中村威也「額濟納調査報告記」

高村武幸「K七一〇遺跡の性格について——居延県城と漢代河西社会の補遺」

片野竜太郎「漢代辺郡の都尉府と防衛線——長城防衛線遺構の基礎的研

粉山明・佐藤信編
文献と遺物の境界

中国出土簡牘史料の生態的研究



B5判 296頁
六一書房
[7980円]

究

第二部 研究篇

粉山明「序論——出土簡牘史料の生態的研究に向けて」

李均明（青木俊介訳）「簡牘文書の種類と遺址諸要素の関係」

刑義田（中村威也訳）「漢代簡牘文書における正本・副本・草稿と署名の問題」

青木俊介「候官における簿籍の保存と廃棄——A8遺址文書庫・事務区画出土簡牘の状況を手がかりに」

高村武幸「簡牘の再利用——居延漢簡を中心に」

鈴木直美「馬王堆三号墓出土簡にみる遺策作成過程と目的」

佐藤信「日本古代文書木簡の機能と廃棄」

初山明「簡牘・縑帛・紙——中国古代における書写材料の変遷」

劉増貴（鈴木直美訳）「下層の歴史と歴史の下層——台湾における「中国社会史」研究の回顧」

陶安あと「書写材料とモノの狭間——日本木簡学との比較を通じてみた中国簡牘学のジレンマ」

後記

第I部の調査報告も新たな知見を多く提供してくれる充実したものであるが、それを含めたこの十三篇全てについて内容を紹介し、個別に論評を加えることは紙幅に限りがあり、評者の能力不足からも困難なので、本書の副題に掲げられた「簡牘史料の生態的研究」というやや耳慣れない言葉に引き付けられて特に印象の深かった論考数本について内容を紹介し、全体の感想を述べることで書評としての責めを果たしたい。編者の初山・佐藤両氏をはじめ各論考の執筆者諸氏、そして本誌読者の方々にはその点をあらか

じめご容赦頂きたい。

刑義田論文はこれまで議論されてきた簡牘文書の正本・副本・草稿、署名の問題について多くの具体例を種々の図版で示しながら検証し、作成・使用・移動・保管という一連の過程、すなわち漢代の辺境における文書行政の実態を考察している。それによれば、居延や敦煌で出土した簿籍・文書のはほとんどはルーティンワークに属するもので、下書きを経ずに書吏によって一度に数通書かれ、そのうち文書作成の責任を負う属吏によって長官の名と日付が補筆されて発送されたものが正本となり、補筆された上で保存されたものが底本あるいは副本となった。従って署名や日付が空欄になっている文書の一部は発送を待っている正本であった可能性があり、正本が発送元の部署から出土することもあり得る。「副」と称される副本には複数の性格があり、保存書類として用いられる一方、再度書き写されて他の部署に発送されることもあり、そのうち主要な対象ではない関連部署に発送されたものが「副」と称され

た。そのため同一文書でも受領・保存・再発送という過程の中で占める位置と機能によって正・副の性格が重複したり転換したりする。このような書写・伝送・複数部署へ同時発送が繰り返行われた複雑な状況において文書の正本と副本は、理論上、内容だけでなく標題簡まで一致すべきもので、相違は自筆による署名の有無や発送・受領記録における時間差の発生、封題、発送・受領者の相対的地位による異なる用語の使用ぐらいにしか見られず、その区別は困難である。「草」と称される草稿は訂正の痕跡があること、代替符号があること、書写がやや草卒であることを特徴とするが、当該地区の部署が日常的に多く取り扱うルーティンな事務に関係する公文書には定型の書式があつて下書きを必要とせず、また正本や保存用の副本が完成すれば草稿をわざわざ保存する必要もなかったため、明らかに草稿と判断できる出土例は非常に少ない。これらは「暫定的な仮説」として提示されているが、同一遺跡から出土した簡牘資料に作成段階の異なる文書が存在

することや、正本・副本という性格が文書行政の過程の中で変化するといった指摘などはこれまでの議論に一石を投じるものであり、非常に重要な論点になるだろう。

青木論文は漢代に甲渠候官が置かれ、俗に破城子と呼ばれる遺跡（A8）から一九七〇年代に出土した新居延漢簡七七〇〇枚余りを主たる史料とし、その内容と遺跡内部の出土地点や出土状況との分析を通じて、候官内部における文書の傾向や保存・整理・廃棄などの業務について考察する。そこではまずA8遺跡全体を塙牆の内外の二区に分け、さらに内部を東西南北の四区、計五つに区分し、各区画での簡牘の出土状況を整理する。次に甲渠候官に勤務する吏卒の生活区画とされる塙内東部からは現代のトイレットペーパーに相当する籌木など、再利用された簡牘が多く出土している一方で、文書庫と目されているF22からは四十組の冊書を含む九〇〇枚近くの簡牘が出土していること、対して吏卒の事務区画とされる塙内西部から出土した簡牘の八〇

パーセントにあたる一一六〇枚余りがT40・43・65から発見されていることに着目し、文書庫および事務区画出土の簡牘資料の傾向を以下のように分析する。文書庫出土の簿籍簡は同一の筆跡で複数の部

（候官の下部組織）にまたがる「吏廩食名籍」のような冊書や甲渠候官から発信された簿籍の送り状など内容に一定の傾向が認められるため、原則として甲渠候官でまとめられた上呈簿籍の写しと考えられる。事務区画出土の簿籍簡は筆跡が異なったり、食糧受領の印「卩」が書かれたりした部燧から提出された簿籍や候官内部の記録といったものの原本であり、またまりのなさや広範な年代分布、あるいは背面の習書といった点を考え合わせると、事務区画のT40などは廃棄された簡牘を再利用に供するための退職庫と位置付けられる。このことから候官では上呈簿籍の写しだけを保存し、それをまとめる際に利用された部燧提出の簿籍原本は廃棄していたと結論し、辺境の軍事防衛組織における報告・監査責任のありかたを展望する。従来の簡牘研究で重要視

されてきたのは遺跡単位での出土地点であったが、本論考は遺跡内部の出土地と内容とを組み合わせることで簡牘資料のよりミクロな生態を明らかにしており、その点に意義が認められよう。

高村論文は居延漢簡の実見調査を踏まえ、札や両行など一般的な書写材料としての簡牘の製作・再利用・廃棄という一連のライフサイクルのうち再利用に重点を置いて検討する。それによれば、まず簡牘の製作について、候官・都官を含む県級官府で消費される簡牘は基本的に当該官府が戍卒の雑役として原材料の調達（「作簿」）に見える「伐木」・「伐財用」から加工製作（同じく「木工」・「削工」）までを行ったが、場合によっては原材料やすでに書写材料として加工されたものが購入されることもあった。また烽燧などの簡牘製作に必要な労働力を確保することが困難な末端組織には候官などから製作された簡牘が定期的に供給された。次に製作された新品の簡牘が当初の使用目的を終えた後の再利用については多様な形態があり、最初に書写された内容を削り落

として再び書写材料として利用する場合と書写材料以外の再利用に大別され、後者はさらに木(籌木)・木製品に細分される。籌木として再利用する場合は斜め切断加工や焦し加工が施され、そのような居延漢簡は比較的多く存在するが、それは甲渠侯官管轄下の全吏卒三百人近くの日々の生理現象から説明が可能である。このような簡牘の再利用の形態から「異処簡」(内容からは本来出土するはずのない遺跡から出土する簡牘)が主として籌木として使用するために書写面削除加工がなされないまま適宜貫い受けられてきた使用済みの簡牘であった可能性を指摘する。木製品としての再利用には木匙と動物を捕らえる罟の一部を例示する一方、従来そのような簡牘の再利用として認識されていた遺物の中には木製品やその破損品に適宜文字が書き付けられている事例が複数あることを実見の結果から指摘する。そしてこの種の遺物を日本木簡学の分類に倣い、記された内容とは別に分類するか、広義の習字簡に分類するのが妥当であると提案する。本論考で

検討された札や両行などの簡牘の製作・再利用・廃棄という一連のライフサイクルは表4(一七九頁)として結実し、従来の研究でほとんど論じられることのない簡牘の動態的側面を私たちの眼前にまざまざと見せつけてくれる。

鈴木論文は他の論考とは異なり、馬王堆三号漢墓から出土した遺策という墓葬出土簡牘を用いて葬送儀礼における作成から埋葬までに至る遺策特有のライフサイクルを検討し、その性格や目的を考察する。そこではまず『儀礼』既夕礼篇などの伝世文献と先行研究に基づき、遺策は葬礼の準備リストとして書き起こされ、途中改訂が加えられた後に点検に使用されるものと推測する。次に馬王堆三号漢墓遺策の記載内容と実際の副葬品とを対照し、遺策記載の品目・数と小計がしばしば合わないこと、料理・食品を盛る鼎・卑虎数は部分的に漆鼎や卑虎の数と一致すること、ごく一部に遺策と副葬品の照合を示すチェックマークや記載数の訂正が見られることなどを指摘する。そして竹筭や帛囊に入れられた食品や絹

織物の小計と提供元の内訳が記された簡二三六と副葬品の竹筭や褐、また死者に贈られる衣類「祝衣」に関係する簡に対してそれぞれ個別に考察が加えられ、以上の検討結果から遺策の作成過程が次のように導き出される。個々の品目を書いた遺策は葬礼の計画段階において喪家が作成した必要な副葬品や祭奠の準備リストであり、そのリストに従って物品が整った段階で小計簡が作成される。食品について言えば、喪家が用意すべきもののリスト化、食品の用意、竹筭への収納、褐と封印の添付という流れと、それとは別の贈品の内容確認、リストへの追加という流れがあり、両者がともにそろってから小計簡が作成され、埋葬直前までに副葬するか否かが最終的に判断される。このような準備リスト兼贈品リストとしての遺策は副葬品埋納の最終段階で告地策が加えられることにより、執侯家の家丞奮から墓主が死後に赴く地下の世界の「主臧郎中」宛てに「移」された「臧物一編」という冥府宛ての擬制文書へと性格が転換される。本論考の魅力は何と

言つても遺策という墓葬出土簡牘を分析対象としている点であろう。ここで論証された遺策の作成過程や葬送儀礼における機能は、簡牘の形態にさしたる特徴があるわけでもなく、目立った動きもなく静態的に見える遺策も、**初山「序論」**で「多様な生物が各々のライフサイクルを維持しつつ、相互に重なり合い補完し合つて形成している一個の生態系」に例えられた出土簡牘の世界に生息する「生物」の一つであることを象徴的に示している。

以上に紹介した四本を含め、本書所収の論考および調査報告はいずれも冒頭に挙げた二つの欠陥を踏まえた「一片の簡牘を扱う方法は、一篇の典籍に対する場合と異なつて然るべきではあるまいか」(**初山「序論」**)という問題関心を共有し、そこから具体的な史料分析をそれぞれ進めて注目すべき成果をあげている。これは取りも直さず、本論集で提起された視点や方法、史料論が従来の簡牘研究では見られなかった新しい展開をもたらす可能性をもっているということである。そうであるならば、今後はそれがどの程度

有効であるのかを対象となる簡牘資料の種類を広げて検証する必要がある。例えば、辺境出土簡牘と類似した行政文書である里耶秦簡や走馬樓漢簡などの古井出土簡牘ではどうなのか、のように。勿論これは本書執筆者諸氏への要求などではなく、むしろこれを機に、簡牘資料を扱っている研究者がそれぞれの立場から検証し、その結果を重ね合い補完し合つて体系的な出土簡牘の世界の構築を目指すことができれば、という大それた夢想である。かく言う評者も本書で主に用いられた簡牘よりも一篇の典籍に近い墓葬出土簡帛を研究している一人としてどのように応えられるのか、読み終えてからいまだに模索中である。そのような意味においても、中国に限らず、また簡牘に限らず、あらゆる出土文字資料に関わる研究者が一人でも多く本書を読まれることを切に願っている。なお後記によれば、すでに漢簡の史料分析を中心とする本書の続編の出版計画が進んでいるという。本書読書中の知的興奮と今も続く墓葬出土簡帛ではという自問を思うと、嬉しく

も悩ましい予告である。
(もり・まさし 早稲田大学長江流域文化研究所・招聘研究員)

中国出土資料學會

平成二四年度第一回例会

▼日時：7月21日(土)、受付開始12時半
、研究報告13時～17時▼場所：流通経
済大学・新松戸キャンパス高層棟20教室
*JR(常磐線・武蔵野線)新松戸駅より
徒歩4分▼報告「二无」一「耶」字の使用域
——馬王堆帛書・銀雀山漢簡の齊・晋系要

素(北條立記、後漢時代における顔回像
(井ノ口哲也)、「武威醫簡注釋及相關問
題研究舉隅」提要(袁國華)▼参加費(資
料代を含む)500円*非会員の来聴を歓迎
します▼連絡先：山梨県立大学国際政策
学部 名和研究室 Tel：055-224-5276
Fax：055-228-6819 E-mail：nawa@
yamana-shi-ken.ac.jp